

特集：公共交通が支える持続可能なまちづくり

[地域の活力を支える高松琴平電気鉄道]

一般社団法人シアターキューブリック
代表理事／脚本家・演出家

緑川憲仁

Norihito MIDORIKAWA

Profile

平成12年にシアターキューブリックを結成。全作品の脚本・演出を手掛ける。「人と人とを結ぶ」演劇の特色に着目し、地域振興や表現教育など「まちづくり、や「人づくり」の道具として演劇がもつ新たな可能性を見据えたさまざまな活動を行っている。「ローカル鉄道演劇」は、そこでしか上演できないオリジナルストーリーと物語の要素を詰め込んだまちあるきで、演劇で地域活性をする新たな取り組みとして注目されている。

文◎茶木 環／撮影◎加藤有紀／撮影協力◎東向島珈琲店
写真提供◎一般社団法人シアターキューブリック・高松琴平電気鉄道株式会社

ローカル鉄道演劇で 地域の魅力を再発見する

平成27年9月19日から5日間、ことடன்琴平線の走行中の車両を舞台に

演劇『ことடன்スリーナイン』が上演された。

鉄道という地域の人々にとって日常の交通手段が

地域の魅力を伝える非日常空間に変わる。

主催は「演劇でまちづくり」を掲げる劇団、シアターキューブリック。

脚本・演出を手掛ける緑川憲仁代表理事にお話を伺った。

沿線を舞台に描くオリジナル脚本

のスタイルがで上がった」

これまで手掛けた「ローカル鉄道演

東京・墨田区を拠点に活動する劇

団、シアターキューブリック。平成12

年の結成以降、全作品の脚本・演出を

手掛ける緑川憲仁代表理事だが、走行

中の車両で公演を行うというアイデア

はどこから生まれたのだろうか。

「ある劇場公演で、鉄道の車内を模

した舞台セットをつくったとき、これ

を本物の車両の中で上演したら面白い

んじゃないかと考えた。東京にはたく

さんの劇団があるので、ほかの劇団と

差別化できるという期待もあった」

最初に企画を持ち込んだのは、銚子

電気鉄道。ぬれせんべいなどユニー

クな事業を打ち出す鉄道会社だ。

「快く承諾してくださった上、『せっ

かく銚子までお客さまに足を運んでい

ただのだから、車内のお芝居だけで

はなく、地元のまちあるきを加えたら

どうか』とアドバイスいただき、基本

合計6本になった。

「シアターキューブリックは、本来、

ファンタジーテイストの演劇を上演し

ている。列車という、ある意味とても

リアルな日常空間に、大人が楽しめる

ファンタジーテイストをどれだけ盛り

込めるか。自分たちへの挑戦でもある」

ストーリーは毎回オリジナルの脚本

で、執筆のために10日間程度、現地に

滞在するという。あまり知られていな

い地元の情報や楽しみ方、自分の目で

確かめた魅力を作品に盛り込んでいく。

ことடன்スリーナイン

ことடன்では、平成27年9月19日か

特集：公共交通が支える持続可能なまちづくり

【地域の活力を支える高松琴平電気鉄道】



舞台となる車両の前でフォトセッションする劇団メンバーとことでん真鍋社長ら。

ら23日の5日間に12公演を行った。

「ことでんは、例えばキャラクターの『ことちゃん』やユニークな広告ポスターなど面白い企画をたくさん手掛けている。ローカル鉄道演劇の上演についてもすぐに了解して、ストーリーも自由につくっていいと言ってくれた。自分たちが地域を盛り上げるツールになるという信念で活動されているのだと思う。そこは、私たちの思いと重なっている」

『ことでんスリーナイン』は、久々に故郷を訪れた3姉妹が主人公で、ほのぼのとした雰囲気の中に少し切なさが織り込まれたファンタジーだ。

「取材に行くと、車窓から見えたのは、旅情をかき立てる美しいのどかな風景。おむすびのようなきれいな形の山がいくつもあって、池もある。こんな景色を物語に反映させたいと思った」効果音も照明も一切なく、BGMはギターのみ。車窓の景色や電

車の走行音、そして観客のすぐそばで芝居をする役者の存在感が一層の臨場感を醸し出す。

ことでんならではの仕掛けも盛り込んだ。ことでんの3路線は琴平線Ⅱ黄、長尾線Ⅱ緑、志度線Ⅱ赤とシンボルカラーが設定されているが、物語に登場する3姉妹も3色お揃いのペンダントを着け、ストーリー上のキーアイテムとなっている。

演劇列車は、どの鉄道会社も貸切、または演劇車両のみ貸切で運行され、観客は全員着席して観劇する。ことでんでは、大正14年製のレトロ電車が舞台装置として使用された。

出発駅である仏生山駅から滝宮駅までの約30分間で前半のストーリーが展開され、ここでいったん下車して2時間のまちあるきをする。ガイド役は劇団のスタッフで、物語に登場する場所を案内し、架空のエピソードを加えてストーリーに深みを持たせていく。

「レトロ電車も滝宮駅も近代化産業遺産に指定された貴重なもの。それを自由に使わせていただいた。観客の方々には、ことでんが大切にしている古さや沿線の歴史を楽しんでいただけたと思う。まちあるきには複数のコースを用意したが、演劇に感激して、違うコースを体験するためにリピートで来てくださった方もいた」

復路も約30分で、車内で芝居の続きが展開される。まちあるきの余韻に浸

りながらの観劇となり、また、車窓からの景色にタイムリングを合わせたセリフによって、盛り上がりは最高潮に達する。そして終点の仏生山駅に到着して物語は終わりを迎える。

よそ者の視点で地域の魅力を探る

ことでんでの上演の2カ月後には、『ことでんスリーナイン』とリンクさせた演目を、ひたちなか海浜鉄道で公演した。

「地方都市は劇場も少ないので、演劇列車に乗って『初めて演劇を見た』という人も多い。そして『地元のことを取り上げて芝居をやってくれてありがとう』と言ってくれます。そんな言葉聞いたとき、つくる段階から地域の人と一緒に取り組んでいけば、演劇を活用して地域をアピールすることができる、地域に人を呼べると、改めて思いを強くした。演劇にはそういう力がある。パイ自体は小さいが、まちの活性化に少しは役立つのではないかと思う」

そして、公演ごとに地域の人たちと一緒に作りながらも、緑川代表理事はあえてよそ者の視点を持って臨んでいるという。よそ者の目線だからこそ、見えるものがある。

「地方都市に行くと、自分たちの場所には魅力的なものがないと言われることが少なくない。地元の魅力に自信

を持っていないのだと思う。でも何も魅力がない場所など絶対ない。こういうところを、よそから来る人は楽しんでくれるんだという気づきのきっかけになればいい」

ただ、よそ者ができることには限りがあるという。

「これは自分自身の今後の課題でもあるが、東京から公演に行く私たちはその地域にとって打ち上げ花火的な役割。短い期間でワーツと盛り上げて引き揚げてしまう。やはり地元の人が地域を盛り上げる主役であるべきだと思う。樽見鉄道の公演の後には、地元高校の演劇部の生徒たちと交流を持つようになった。今後は『若者』をキーワードにした、これまでとは異なる形の演劇で、地域活性化に関わってみたいと思う」



観客の目の前、物語は車内全体を使って進む。